



口絵 三井高公と自動車愛好仲間

三井高公（写真左）は三井総領家（北家）当主高棟の次男として明治二八年（一八九五）に生まれた。長男高壽が夭折したため、高公は総領家の跡継ぎとして育てられ、京都帝大を卒業後、英国遊学を経て、昭和四年（一九二九）九月に三井財閥の統轄機関三井合名会社の社長秘書役に就任した。

しかし、その直後に起こった昭和恐慌の中で「ドル買い」批判を中心に財閥攻撃が激化し、昭和七年（一九三二）三月には三井合名理事長で最高実力者の團琢磨暗殺に至るなど、三井財閥を取り巻く時代環境は大きく変化していった。この中で昭和八年（一九三三）三月には團とともに三井財閥の発展を支えた父高棟が隠居し、代わって高公が三井総領家家督を相続、同時に三井合名会社社長の重責を担うこととなった。このとき高公はまだ三七歳の若さであった。

その後、恐慌から太平洋戦争に至る激動期に三井財閥は若き指導者高公を中心に、昭和一五年（一九四〇）八月三井合名と三井物産の合併、一九年三月株式会社三井本社設立と目まぐるしい改組により統轄組織の株式会社化を達成、増大する資金需要に応ずる形を整えるとともに、軍需部門を含む重化学工業化を推進し、戦時経済に対応していった。

だが、その行く手に待っていたのは昭和二〇年（一九四五）八月の敗戦と続く民主化の嵐であった。連合軍総司令部は財閥の「戦争責任」を問うと同時に「経済の民主化」推進のため、財閥解体の方針を表明した。三井側は三井本社解体を回避すべく抵抗したが、総司令部の方針を変えることはできなかった。二〇年（一九四五）一月三井本社社長高公は同社従業員に三井本社解体の声明を出し、翌一二月に社長を退任した。激しい時代の波の中で三井財閥の舵を取るといふ彼が担った困難な仕事も、こうして財閥解体とともに終わりを迎えた。そして、昭和二一年（一九四六）九月に三井本社が、翌二二年（一九四七）七月には三井物産がそれぞれ解散し、清算過程に入ることなる。

戦後、高公は父高棟にならって二郎右衛門を襲名（昭和三〇年九月）、社団法人日本工業倶楽部理事、三井不動産相談役、当三井文庫評議員会会長などを歴任し、平成四年（一九九二）一月波乱に富んだ九七年の生涯に幕を下ろした。

ところで高公は無類の自動車マニアであった。写真は愛車をバックに同じく自動車愛好仲間の松平康邦（高公義兄、写真中央）、伊達十郎（南三井家縁戚、写真右）とともに撮影されたもので、大正後期、高公二〇代のもものと推定される。モダンなスタイルに身を固め、自慢げに愛車に寄りかかる若き日の高公には、この後に彼を待ち受ける過酷な運命など想像すらできなかったであろう。（花井）